



山田西リトルウルフ指導者

棚原安子たな はら やす こさん(80歳、山田西1丁目)

## 野球で「人」を育てる

子供たちの元気な声が響きわたるグラウンドで、ひときわ気合いの入った声とともにノックをこなす女性の姿があった。

少年野球チーム「山田西リトルウルフ(以下、ウルフ)」の「おばちゃん」こと棚原安子さんだ。ウルフは、小学生約140人が在籍する大所帯で、全国大会に出場したこともある強豪チーム。棚原さんは、中学、高校とソフトボール部に所属し、卒業後ソフトボール選手として実業団でプレーした後、昭和47年に夫とともにウルフを設立。昨年、傘寿を迎えたが、現在も現役で指導を続けており、子供たちには「おばちゃん」と呼ばれ親しまれている。OBOGの数は延べ1200人に上り、プロ野球オリックス・バファローズで活躍するT岡田選手もその一人だ。

ウルフでは、自分の身の回りのことは自分ですという決まりがある。子供たちは各自でユニホームの洗濯や飲み物の準備を行う。そのほかにも、月1回の新聞回収を行い、作業で得たお金はチームの運営費に充てているという。これは、昔から変わらない棚原さんの指導方針だ。チームに所属する子供たちに求める最低限の目標が「最初はボールを捕れなくても、6年生までに野球ができるようになること」であり、最大の目標は「野球を通し

て、社会で生きていくために必要な知識を身につけること」だと棚原さんは話す。

先日、うれしいメッセージが届いた。過去に在籍していた教え子からだった。そこには、テレビで棚原さんが紹介されているのを見たこと、昔と変わらず熱い思いを持って指導をする姿に当時を思い出し、改めて感謝を伝えたくなくなったことが書かれていた。「日常生活でも自主的に動くことが求められる環境があったおかげで、人として何が大切なのか教わりました。」と書かれたそのメッセージを読み、棚原さんは「自分の伝えてきたことが、何年たっても教え子たちの中に残っていることがうれしい」と笑顔で話した。

「へその緒が切れたときから、子供は世間の預かりものやと思って育てなあかん」。子供が社会に出てから立派に生きていけるように自立心を育むことが大人の役目であり、それこそが子育てだという「おばちゃん」の熱意は、これからも野球を通して子供たちに伝わり続ける。

